

あいうる

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

北海道歴史秘話 40

西南戦争の頃、清国經由の コレラが大流行し、北海道でも 西郷さんのタタリと恐れられた。

コレラの発生

明治十（一八七七）年二月、旧薩摩藩士で明治維新の立て役者、西郷隆盛率いる鹿児島土族の軍と、明治新政府軍が熊本城を中心と争った。世にいう「西南戦争」だ。明治政府は北海道の屯田兵にも動員を命じ、琴似・山鼻二兵村で一大隊を編成した。屯田兵大隊の幹部の多くが旧薩摩藩出身者で、西郷とも関わりがあり、複雑な思いでいたが、兵員は戊辰戦争で西郷が指揮する明治新政府軍に敗北した東北諸藩の土族であったため、鹿児島土族からなる西郷軍への敵愾心は旺盛であった。

屯田兵大隊は四月、熊本県に上陸し、八月まで激戦地を転戦。九月に札幌に凱旋した。ところがこの凱旋にもう一つ余計なものがついてきた。コレラが持ち込まれたのだ。

当時、清国（現在の中国）でコレラが流行しており、それが西南戦争中、外国との貿易都市・長崎に侵入した。清国から長崎への航海中、一人の水夫が死亡し、長崎の外国人墓地に埋葬された。それからしばらくして、船と陸とを行き来する外国人を世話していた日本人水夫が病気になる、その日のうちに亡くなった。コレラに感染したのだ。コレラは長崎から九州一円、そして全国に広がった。

感染拡大に拍車をかけたのが西南戦争だった。

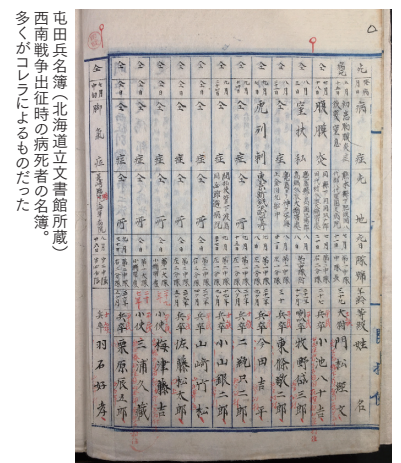
九月二十五日、横浜から帰還する屯田兵を乗せた「秋津州丸」が函館に入港したとき、船内で二人が発症。三日間の停泊中、

更に八人が発症したため、罹患者は七重浜に臨時に設けられた伝染病専門病院に収容された。これをきっかけに、函館市内の罹患者は、あつという間に数十人に達した。また、小樽でも「秋津丸」の入港によって、コレラが広がった。

「西郷病」

コレラは罹ればイチコロで死ぬことから「コロリ」とも呼ばれたが、西郷が死んで鬼になって新政府軍を殺しているのだという噂が広がり、人々は「西郷病」と呼んで恐れおののいた。当時はまだまだ呪いや祈祷が頼りの時代。函館・札幌の看護人や患者運搬人たちは、恐怖に駆られて解雇を願い出たり、逃げ出したりしたという。

このコレラの流行は、北海道が伝染病に無防備であることを露呈し、あわてて道内各地に伝染病専門病院が建てられ、医師や病院不足を見直した。



屯田兵名簿（北海道立文書館所蔵）
西南戦争出征時の病死者の名簿。
多くがコレラによるものだった

当時のコレラの予防・消毒・治療は、拙劣なものだった。お役所の対策といえは、集会やまじない・祈祷の禁止、生魚・野菜類の販売禁止、清掃の励行呼びかけのほか、石灰酸水の散布程度であった。

この年、全国の患者は一万三七一〇人、うち死者は七九六七人を数え、道内の患者総数は一二七人、うち死亡が九三人であった。

止むことのないコレラの流行

それから二年後の明治十二（一八七九）年四・五月頃から、コレラが再び九州・四国で発生。たちまち大阪・兵庫に蔓延し、全国各地へと広がった。

開拓使もコレラの予防に努力していた。しかし同年七月、大阪から回漕した商船「八幡丸」が忍路に停泊したとき、水夫が突然死亡した。誰もコレラ患者とは気づかずその村に埋葬したが、翌日に会葬者の中から罹患者が出て、たちまち付近の住民に伝播し、次第に後志・石狩・室蘭へと広がっていった。

開拓使は予防のため、道内各港に検疫所を設け、住民に生魚・貝類・野菜類の販売劇場での集会を禁止した。このときの道内患者数は二三五人、死亡者は一二〇人であった。

更に八月、函館に入港した船舶にコレラ罹患者が出て、市街地に蔓延。患者数は二五三人、死亡者は一八六人を数えた。また、十月には青森から紋別に入港した和船の水夫からコレラ患者一人が発生し、五人が死亡した。

結局この年、全国で一〇万人以上が死亡し、道内のコレラ患者総数は五一三人、死亡者三一五人となった。

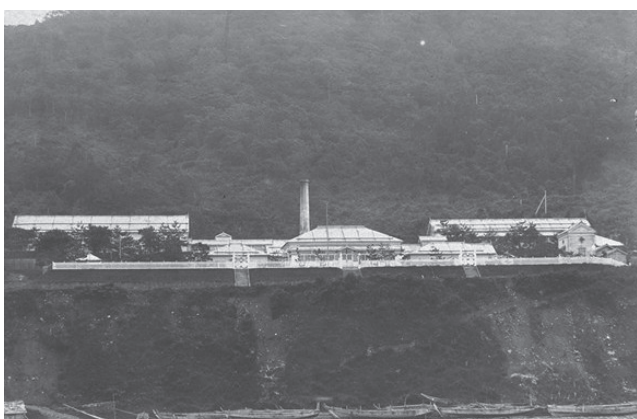
西郷さんのタタリ

コレラはその後ますます猛威を振るい、明治十九（一八八六）年にも全国各地で大流行し、この年も死亡者が一〇万人を超えた。北海道でも七月に、横浜から函館に入

港した船の水夫から罹患者が発生。予防の甲斐なく全市内に感染し、その後全道の港へと広がっていった。中でも函館の罹患者が多かったため、伝染病専門病院に収容できない患者が巷にあふれるという、悲惨極まる有様であった。

この年はついに全道で患者数が二九四一人、死者二二五九人と最悪となり、西南戦争終結から一〇年近く経っていたのにもかかわらず、「西郷さんのタタリ」とささやかれた。

その後、コレラは同二十八（一八九五）年に北陸地方から流行し、北海道も八八人が罹患し、五七人が亡くなった。更に同三十五（一九〇二）年の全国での流行により、函館でも九九人の罹患者が出て、七三人が亡くなったが、これを最後にコレラ伝染病の猛威は、ようやく下火となった。



海港検疫所（函館消毒所）（『明治大正期の北海道（目録編）』より転載）
内務省により建設が進められ、明治19年に函館区山背泊町に開設された



あうるの杜

絵本作家
ほんままゆみさん

Interview

亡き友の下絵をもとに
絵本『ゆき ゆき ゆき』を
出版した絵本作家
ほんままゆみさんの
あうるの杜です。

幼児期〜学生時代

私は、大通公園近くで生まれ、乳幼児期を過ごしました。母が映画好きで「禁じられた遊び」「汚れなき悪戯」「ノンちゃん雲に乗る」などを五歳前後と一緒に鑑賞。五歳なりに、画面から伝わる悲しみ、驚き、喜び、美しさ、不可思議さなどを感性で受け止めて「ものごと」を体全体で味わっていたのだと思います。

長じて、創作絵本が出回り始めた学生時代は、本屋で絵本をよく立ち読みしていました。家庭教師のアルバイトで得た初めての収入で購入したのが「なつのあさ」（谷内こうた文・画、至光社）。「なつのあさはみんなしろい」という出だしの詩的なフレーズと絵に魅せられました。

女子アナウンサーに

当時女子大生への公募の専門職は数少なく、女子アナウンサー職はその一つ。報道に関心が高かつ

自然を愛する 気持ちの 大切さを



たので放送局の仕事を得て、ありがたく嬉しかったです。入社二年目にテレビの五分番組を任された時、上司や先輩から伝えられたのが「これからのアナウンサーは原稿を読むだけではなく、自分で考え企画・取材し、自分の言葉で視聴者に伝えられる力を備えること」。即、実践。次の年は（一分番組に）三年弱の体験でしたが、この間に培った「自分で想い、考え、行動

海外生活で

し、耳を傾け、己の言葉を深めて語る」を、今でも心がけています。

ほんま まゆみ

絵本作家、「ニセコワイナリー」共同運営。1949年札幌に生まれ藻岩山の麓を駆け回り育つ。多くの国を旅し、文化の違いや様々な暮らしを知り、認め合う大切さを学ぶ。2010年、ニセコ町に移住。夫とオーガニック・ワイナリーを営む。『うまれたてのいろ』『うみがだいすき』『こぐまのはっぱ』を創作。アメリカの絵本『あこがれの機関車』を共訳する。いずれも小峰書店より出版。2020年11月、6年前に亡くなった親友のイラストレーターみちいずみさんの遺した下絵をもとに絵本『ゆき ゆき ゆき』を出版。



撮影：重野 友紀

『うまれたてのいろ』

二〇〇三年に初出版の『うまれたてのいろ』（小峰書店）を上梓。テーマは「生まれてくるものにはそれぞれ色がある・それぞれの個性を大切に」。『ありのまま、自然の姿を大切に』『多様性を認め合うこと』、これが私の一貫したテーマです。

『うまれたてのいろ』出版の直後、自分の言葉はどこから生まれて紡がれたのかを想った時、北海道の自然に戯れ遊んだ中から言葉が築かれたかと思ひ当たり、郷愁にかられました。夫のライフワーク「より環境と身体に優しい有機農業でワイン造り」「スキーが楽しめる雪国で」とも合致。二〇一〇年、学童期を過ごした札幌市藻岩山の麓の原風景があるニセコ町羊蹄山麓の住人となりました。

『ゆき ゆき ゆき』

二〇年余り過ごした横浜で出会った友人でありイラストレーターのみちいずみは、私の言葉や文章から素敵な絵を描いてくれる人でした。『ゆき ゆき ゆき』のための下絵を描き始め、〇七年秋には下絵が完成。しかし、癌が徐々に進行し、完治してから完成さ

せようと約束しましたが、みちは一五年春天国へ。一八年暮れ、『ゆき ゆき ゆき』完成を目指し、作者、画家、翻訳者と国内外のやり取りが頻繁に飛び交う一〇か月余、お陰様で作者として納得のいく作品になりました。

人間、いずれ土に帰ります。自然に生かされ自然に還っていく命の円環での存在。目に見えない微生物も含め、息づくすべてを内包する「自然」を大切にしたいという気持ちは、子ども時代に自然と戯れ遊び、自然に抱かれる心地よさや楽しさを味わってこそ。北国の春夏秋冬、山の麓で兄と姉と一緒に駆け回って遊んだ日々。その冬の日の一日を『ゆき ゆき ゆき』で描きました。

早朝の冷たい空気に、時を刻みながら青空に輝くお日様の陽射しが優しく滑り込み、子どもたちは雪遊びに夢中になり、時を忘れて過ごします。たとえ寒さが肌を刺し、息を止めるような吹雪の日でも、風に向かい雪を漕いで遊んだ子ども時代の懐かしい記憶。子どもたちの故郷・北海道の大自然と触れ合い遊んだ日々が、長い人生を生き抜く力の源になっています。自然を愛する気持ちの大切さ！『ゆき ゆき ゆき』での私からのメッセージです。

「言葉に見る欧米と日本の違い」

アメリカでは相手の名前を呼ぶとき、親しい間柄であれば、年上・年下関係なく John とか Paul とか、ファーストネームで呼びます。兄弟・姉妹でも同様です。brother、sister とだけしか言わないので、兄なのか弟なのか、姉なのか妹なのか判断ができず、日本人である我々は違和感を覚えます。

どうやら欧米では、年齢の上下により敬意を表現することはないようです。おそらく、欧米には兄弟の関係を重視した家父長制がなかったからでしょう。そこが日本とは大きく異なります。

英語が「I」「We」「You」「He」「She」などという呼び方しかもっていないのは、昔から人間関係をお互いに立場の違う、契約書でいえば甲・乙の関係にある者と認めていたからです。自分と相手は根本的に違う、という認識に裏付けられているのが、欧米語の人称代名詞なのです。

対して日本語社会では、いつも相手が自分より上なのか下なのか、親しいのか疎いのかを判断して、会話を展開していきます。

「兄貴、あの野郎、来やりましたぜ」と子分が兄貴格に対して言ったとします。来る相手に対し「あの野郎来やがる」と侮蔑的に扱っているとともに、「ましたぜ」と言って、兄貴分への敬意を忘れません。

日本人は、会話をするとき、相手が自分をどう見ているかという、上下関係に神経を使い、相手にどう接したらいいのか、ほどよい度合いを考えながら話をしています。

言葉一つ見ても、欧米と日本とは随分違うものですね。

O W L I N F O R M A T I O N

生理学から健康維持にアプローチ

おとなの養生訓

當瀬規嗣・著

定価:1,320円(税込)

札幌医科大学医学部の當瀬教授が健康維持の方法や考え方を専門の生理学に則して紹介する連載記事が待望の単行本化。「お酒」「食」「健康」「生活習慣」「知恵」の5つのテーマで再編集され、さらに読みやすくなりました。

北海道建設新聞の人気連載から厳選した69話に加筆・訂正。軽妙なエッセイを気軽に読み進むうちに、生活習慣の偏りを積み重ねないためのちょっとした知恵が身につく、現代の養生訓です。



中西出版
四六判、159頁
2020年10月刊行

よみがえるあの時代の風景

路地裏探索 道草画報

松本浦作品集

松本浦・著

定価:1,980円(税込)

今なお路地の片隅に存在している、どこか昭和を思い起こさせる家並みや、未だ存在感を放ち佇む古い建物たちを描きためた、挿絵画家・松本浦さんの初めての水彩スケッチ画集。

時代のひだに消えゆく街並みを描き続ける松本さんは、札幌を中心に北海道内の港町や炭鉱、東京の街角などを取材。懐かしさを感じる風景を温かなまなざしで描いています。未発表を含む61点の作品を収録しました。



中西出版 A5判、128頁
2020年12月刊行

毎朝がたのしい!

ねぐせきょうだい

加賀城匡・絵・文

定価:1,100円(税込)

朝起きるといつも「ねぐせ」が爆発しているふたりの兄妹。ねぐせはいよいよ、でも「おはよう」とふたりが顔をあわせると、ねぐせがなにかのかたちに見えてきて……。

毎朝いろんなかたちになるこまっちゃうねぐせを、兄妹はいろいろなものに見立てていきますが、みなさんには何に見えるのでしょうか。

想像力を刺激する絵を、軽快なことばのリズムで楽しめ、次の朝になるのがわくわくしてくるような絵本です。



中西出版 A4変型判、32頁
2021年2月刊行

4つの時代を生きた激動の記憶

町村金五の二十世紀

若林滋・著

定価:2,640円(税込)

北海道知事として3期12年を務めた町村金五。常に時代のうねりの傍らを歩いたその92年の生涯を通して激動の明治から平成、北海道の20世紀が鮮やかに甦ります。

札幌農学校出身の父を持つ金五は、札幌に生まれ旧制二高、東京帝大へと進み官僚として各地で要職を歴任。戦後は国会議員、北海道知事、自治大臣として日本、そして北海道に献身しました。歴史を北海道からの視点で描く著者の最新作。



中西出版
四六判、411頁
2020年12月刊行

原初の素材で創る陶の作品集

下沢敏也作品集(改訂版)

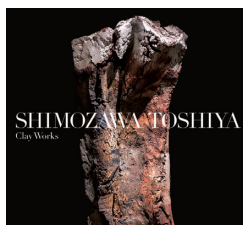
SHIMOZAWA TOSHIYA Clay Works

下沢敏也・著

定価:2,200円(税込)

2013年に刊行した『下沢敏也作品集 Art Works of SHIMOZAWA Toshiya』の改訂版。初版から作品の入れ替えや新作の追加を行い、寄稿にも佐藤友哉氏のほか森孝一氏、松山聖央氏が加わり12頁増と充実しました。

土と語り合い、火に委ねてかたちづくられる作家の陶の世界。自然のもつ生命の力がみなぎるダイナミックな作品群のほか、陶管や茶碗といった茶器も収録しています。全文訳付き。



中西出版 A4変型判、48頁
2020年10月刊行

コロナ禍に生まれたホンネの本

いなかのほんね

北海道教育大学の学生26名+来嶋路子・編

定価:1,100円(税込)

北海道岩見沢市の山あいに住む人々に学生たちがインタビューする試みから、一冊の本が誕生しました。学生の問いに答えたのは、20年前にパン屋を始めた夫妻やスポーツクラブを起業した青年、商店街でお店を営む店主、半年ほど前に移住した画家など10組の多様な人々。

炭鉱の閉山で過疎が進み、大型スーパーもない地になぜ惹かれ、住むのか。語られた本音は、しなやかに生きるヒントにあふれています。



中西出版
A6判、215頁
2021年3月19日刊行予定

